
水面に映る空は青く

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水面に映る空は青く

【Nコード】

N4548BA

【作者名】

さら

【あらすじ】

僕らが生まれたあの町は、大きな川が流れているだけの、本当になんにもない町だった——そんな田舎町で暮らす、幼なじみの真尋・朱里・蒼太。いつも一緒だった彼らに起きた、ある夏の悲しい出来事。それぞれの想いを胸に抱きながら、三人は少しずつ大人になっていく。

僕らが生まれたあの町は、緑が生い茂る山々と大きな川が流れているだけの、本当になんにもない町だった。

中学高校時代、水泳部だった僕の思い出といえば、学校のプールの匂いや眩しい太陽。それから水しぶきを上げながら泳ぐ、あの子の姿。

将来のことなんか考えられなくて、僕たちはただ今だけを生きていた。生きる意味さえもよくわからずに、ゆらゆらと水の中を泳ぐように……ただ今だけを生きていた。

「真尋^{まひろ}！ ごめんね、遅くなって」

橙色の空の下、高校の校門前で待っていた僕に、朱里^{あかり}が駆け寄ってきた。

「更衣室出ようとしたら、美穂ちゃんに声かけられちゃって」

そう言っただけで朱里は僕の隣に並び、にこっと微笑む。

「いいよ、別に」

「じゃ、帰ろ」

どちらともなく一步を踏み出し、僕たちは並んで歩く。朱里のショートカットの黒髪は、まだしっとりと濡れている。

朱里は僕の幼なじみだ。と言っても、この小さな町では、小中高とずっと同じ学校に通うやつが大勢いる。つまりクラスメイトのほとんが、幼なじみのようなものだ。

ただ朱里とは、特に家が近かったせいか、本当の兄弟のように育った。

夏休みになるとお互いの家で宿題をし、川で遊んで、昼寝をして……お風呂だっで一緒に入ったことがある。

だから、僕たちはあまりにも近すぎて……朱里は僕の気持ちになんか、気づきもしないのだろう。

「もうすぐ大会だね？」

朱里が大きな目をくりくりさせて、斜め下から僕のことをのぞきこむ。小柄な朱里と、背丈だけはひよろひよろと伸びている僕の身長差は、三十センチ近くあるだろうか。

「あたしはダメだけど、真尋はまた選手に選ばれるね？」

「ダメとかいうなよ。朱里、最近タイム伸びてるだろ？」

「ダメダメ、全然。あたしなんか」

「おれだって……今年はきつと無理だよ」

ふたりの間に、微妙な空気が流れる。土手の上を歩く僕たちの脇を、自転車に乗ったおじさんがのんびりと追い越していく。

そうなんだ。高二になって、僕は思うように泳げなくなった。タイムは伸びないし、今年は大会にも出られないかもしれない。

僕はもう——自分の中にあつた大きな目標を、失ってしまったから。

「あ、あのさ」

話題をそらすように、朱里が明るい声で言った。

「真尋、最近、蒼太そうたに会った？」

「……いや」

朱里の口から出た男の名前に、一瞬胸がざわつく。

「なんで？」

「うん……最近、蒼太、学校に来ないから」

「どうせ、さぼってるんだろ？」

蒼太も朱里と同じくらい、長い付き合いの幼なじみだ。朱里が僕と同じように、蒼太のことを大切に思っているのも知っている。

だけど……朱里が蒼太の名前を口にするたび、僕はなんともいえない複雑な気持ちになるんだ。

「でもね、家にも帰ってないみたいだし」

「蒼太んちに行ったのか？」

「だって、心配でしょ？」

「ほっとけよ。もう子供じゃないんだから」

朱里が黙り込む。僕は小さく息を吐く。

蒼太の家は昔から、悪い意味で目立っていた。

仕事もしないで昼間から飲み歩いている父親。そんな父親の目を盗んで、男を部屋に連れ込んでいる母親。

顔見知りだらけの狭苦しいこの町では、まだ子供だった僕の耳にさえ、下品な噂話は聞こえてきた。

そして居場所のなくなった蒼太は、よく家を逃げ出して、僕の部屋に泊まっていた。

だけど最近は昔ほどしゃべらなくなっていて……そういえば学校でも近所でも、あいつの姿を見かけない。

「それじゃ……」

朱里が立ち止って小声で言う。僕たちはいつもの分かれ道まで来ていた。

「また明日ね、真尋」

「……ああ」

小さく手を振って、朱里は僕に背中を向ける。僕は黙ってその姿を見送る。

真っ白なブラウスも、短めのスカートも、濡れた髪も、華奢な体も……何もかもが愛しい。

「あ、朱里！」

僕の声に振り向く朱里。頬がほんのり、夕焼け色に染まっている。「あとで蒼太の家に寄ってみる。ちゃんと学校来いって言うておくから」

朱里が静かに微笑んで、こくんとうなずく。そしてまた背中を向けて去って行く。

僕は朱里のことが好きだった。

いつからかわからないけど、ずっとずっと前から——僕は朱里のことが好きだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4548ba/>

水面に映る空は青く

2012年1月12日10時52分発行